

ファーガス・マカフリーNYは 1952年から1985年にかけて日本とアメリカの複雑な芸術的ネットワークを探求する展覧会「Japan is America」開催致します。

Japan Is America
Fergus McCaffrey New York

会期：2019年10月30日～2020年1月18日

ファーガス・マカフリーは、1952年から1985年にかけて日本とアメリカの前衛芸術に情報を与えた複雑な芸術的ネットワークを探求する展覧会「Japan is America」を開催致します。



1950年代、戦後日本のアメリカナイゼーションと並行して、これまで様々な形で記録に残されている「アメリカンスタイルの絵画」の出現を皮切りに、「Japan is America」は1945年の日本降伏から約40年後、日本がアメリカに拮抗する文化的位置に到達するまでの道筋をみていく試みとなります。この展覧会は、日本の芸術を支え、推進し、アメリカの芸術と文化に大きな影響を与えた今では想像もつかないような二国間の交流をたどります。本展に付随して、ジョン・ケージ、久保田成子、中谷富士子、その他アーティストによる大変貴重な映像の野心的な映像上映プログラムが開催されます。

第二次世界大戦後、両国は戦後の美学の再定義のための余地を見出そうと、文化的境界を越えた認識を求めました。1945年以降、日本は国家再建に注力し、第二次世界大戦での破滅的な敗北からの復興に努めました。1945年から1952年の間、日本はアメリカ軍の占領下となり、民主主義と平和の感情は日本中に響き渡りましたが、当時の日本での芸術は戦争経験からの死や苦しみを反映していました。



「Japan is America」は、1952年に池田龍雄がアメリカ兵の妻を描いた「ポートレート（きぬこすり）」から始まります。スナップショットから制作された写実的な絵画は、朝鮮戦争中に日本の米軍基地に駐在していた兵士達らからの依頼による、それまでにはなかった画家の生業のあり方でした。大阪の具体美術協会（1954-72）は日本の美術界で抽象表現主義を享受した最初のグループの一つでした。吉原は、それまでの日本にはみられなかった西洋式の社会の自由と願望を利用して、彼を師事する画家達に芸術制作と国際文化交流の新しい方法を模索することを奨励しました。1950年代の具体は、「これまでにない、あたらしいものを創れ」をモットーに「従来の形式主義」に反発し、次第に発展していきました。

東京では、草月アートセンター（1958-71）が実験的な視覚芸術とパフォーマンス芸術の実践のための主要なスペースとなり、また日米のアーティスト間の国際交流の拠点となりました。1960年代初頭、ジョン・ケージ、デイビッド・チューダー、マース・カニンガム、ロバート・ラウシェンバーグは、センターからの招待を通じて初めて来日し、その後数年にわたって公演と講演会を開催しました。第二次世界大戦後、ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ（1960）やハイ・レッド・センター（1963-64）を含む、日本のアーティスト

集団の活動が盛んになりました。評論家の東野芳明が造語した「反芸術」を基本理念として、毎年恒例の読売アンデパンダン展（1949-63）に参加した過激なアーティスト達は、よりパフォーマンス的でオブジェクト指向のアートで、ありふれたアイテムとデトリタスを使用して、何かの再現を超えたリアリズムを再定義しました。

1960年に日米安全保障条約（安保条約）が批准された後（米国が日本に影響を与える可能性のある東アジアの紛争に効果的に干渉できるようになった後）、極端な民主主義と帝国主義が如実なものとなりました。1964年の東京での夏季オリンピック、そしてそれに続くアメリカのベトナム戦争への参戦が進行している間、両国のアーティストは、1970年代に過激な個人主義を続けました。



第二次世界大戦の終了から25年後、大阪で開催された万国博覧会は、日本で開催された最初の世界博覧会であり、戦後の復興を反映したものでした。その実験的な建築、文化革新、未来的な技術展示で知られるこの博覧会は、日本の世界舞台での強い存在感を予感させるものでした。中谷芙二子はベル・ラボラトリーズ（Bell Laboratories）が後援していた集団アート実験グループ「E. A. T. (Experiments in Art Technology)」の東京代表として、大阪万博ペプシ館で世界初の霧の彫刻を発表しました。同じ年、日本では10回目の国際美術展となる東京ビエンナーレ1970が開催され、アメリカからはリチャード・セラ、カール・アンドレ、ソル・ルウィットらが出展し、世界の彫刻的、コンセプチュアル、そしてパフォーマンス的な革新への洞察を示しました。また地元日本からは、後に国際的評価を得ることとなる、高松次郎や野村仁ら日本を代表するコンセプチュアルアーティストも参加しました。その後、この展覧会は日本のいくつかの主要都市を巡回し、後にルーシー・リパードの著書「Six Years: The



Dematerialization of the Art Object（6年：アートオブジェクトの脱物質化）」にも取り上げられました。

「Not making」を理念としたもの派の作家達による、コンセプチュアルアートが、ビエンナーレの後に日本で急速な広がりを見せ、早見堯のような日本の批評家が言うように、絵画や彫刻といった物質的な制限なしに作家が「アートやアートの概念を変換する」ことが可能であるかが示されました。二国間の文化的交流は、その強い繋がりから生まれた新たな発展とともに、双方に対するさらに強い好奇心と自信を生み出しましたが、1980年代にマスメディア、肥大化した物質主義、セレブリティの登場が現代美術へ更なる変化を与え、同時に日本とアメリカの前衛芸術の勢いは衰退していきました。



1980年代半ばには、世界で最も強力な国と文化的および経済的な平等性を勝ちえたことにより、アメリカ内での日本の存在感は確固たるものとなりました。日本の広範な影響がアメリカ全土で感じられるにつれ、多様な反応が見られるようになります。展覧会はエド・ルシヤの新作「Japan Is America」のドローイングで締めくくられます。本作品は作家が1985年当初感じた日本の驚くべき

戦後復興、そして豊かで現代的で平和な社会の構築に対する反応を伝えています。

展覧会のハイライトは以下の通りです。

第二次世界大戦後、具体美術協会（1954～72）のメンバーは「ひとのまねをするな」をモットーに活動を開始しました。白髪一雄は天井に吊るしたロープにつかまり、足で描くことという実験的制作方法を試し、本展覧会にも展示されているの地妖星摸着天（1960）などのフットペインティングを制作しました。1959年、ジョー・グッドは、フェルス・ギャラリーの創設者であるウォルター・ホップスによって企画されたパサデナ美術館の具体展を訪れました。白髪と具体の実験主義の影響を受けたグッドは、牛乳瓶やモップなどの日常的なものを作品に取り入れる実験的な実践を追求する自由な発想を与えてくれた日本の美術集団を評価しています。同じような手法は、吉田稔郎のミクストメディア作品にも多く見られ、今展覧会で紹介されている作品もワイヤー、木材、ペーパーマシを組み込んだものです。



1950年代後半に、具体はアンフォルメルに焦点を移し、当時日本を訪問、または滞在していた多くの西洋人アーティストとの関係を発展させました。それらのアーティスト達にはサム・フランシスも含まれます。1962年に大阪でグタイピナコテカが開催され、フランシス、ルシオ・フォンタナ、ジュゼッペ・カポグロッシなど、多くの海外のアーティストらの作品も展示されました。

ロサンゼルスを拠点とするアーティスト、ケン・プライスは「Avogadro Mountain（アボガド・マウンテン）」の売却につながったフェルス・ギャラリーでの個展に成功した後、1962年に6ヶ月間陶芸制作活動のため日本に滞在しました。日本の茶道からインスピレーションを得て、プライスの非凡な彫刻表現の手段としてのカップの陶芸の探求は、彼の作品が持つ使用価値の定着につながりました。



1963年、中西夏之は、高松次郎、赤瀬源平らと共に、ハイレッドセンター（1962～64年）を結成し、オブジェクトをギャラリーの枠組みを越えたイベントに統合し、大量消費と近代化が日本の社会へ与えるの悪影響を分析しました。群衆（コンパクトオブジェ）（1968年）のバージョンは、1962年の東京都内でもっとも混雑する山手線で行われた、「山手線のフェスティバル（山手線事件）」にて披露されたものです。

東京出身のオノ・ヨーコは、1953年に家族とニューヨークに移りました。彼女はローアー・マンハッタンのギャラリーに頻繁に通い、1962年に帰国する前までに

ラ・モンテ・ヤングやジョン・ケージらとの交流を深めました。帰国後にケージやデイビッド・チューダーらと共に、草月アートセンターにてコンサートやパフォーマンスに参加したオノは、代表作となる「Cut Piece(1964)」を発表し、その後すぐ再度ニューヨークに戻ることになりました。



1950年代後半に、具体はアンフォルメルに焦点を移し、当時日本を訪れ、または滞在していた多くの西洋人アーティストとの関係を発展させました。それらのアーティスト達にはサム・フランシスも含まれます。1962年に大阪でグタイピナコテカが開催され、フランシス、ルシオ・フォンタナ、ジュゼッペ・カポグロッシなど、多くの海外のアーティストらの作品も展示されました。

その後まもなくの1966年に、具体メンバーの元永定正は、同年マーサ・ジャクソンギャラリーとの仕事をするために、ニューヨーク、マンハッタンへと渡米しました。彼は現地にて、素材をエナメルからアクリル絵具に切り替え、エアブラシを初めて使用し、政治色のない視覚的言語表現を作品の中にみせます。対して、アメリカの芸術家であるセンガ・ネングディはカリフォルニア州立大学時代に具体について学び、それをきっかけに1966年に日本を訪れることとなります。日本での滞在と経験を経て、作家の焦点は時間と空間、即興、儀式と革新を強調した非物質的で形而上学的なものへ移って行きました。

アメリカのダダ芸術家のように、反芸術家、三木富雄の主題は日常のイメージへと戻りました。三木は人間の耳をかたどった制作に執拗に取り組み、それらの作品は大小、アルミニウム合金で作られました。今展覧会で紹介されている三木の耳の作品は、元永、白髪、小島信明らを含む46人の日本人作家が1960年から1965年に制作した作品を紹介した、ニューヨーク近代美術館での「The New Japanese Painting and Sculpture」(1966-1967)に展示されました。

東京ビエンナーレの機会に、リチャード・セラは1970年にジョアン・ジョナスと共に来日しました。滞在中、リチャードは伝統的な禅庭園に頻繁に足を運び、時間の流れと空間に導かれながら、物質と自然要素が一つとなる現象学的な性質に、インスピレーションを発見しました。

その10年後、ロバート・ラウシェンバーグは1980年初期の来日を機に、シリーズ「Japanese Recreational Clayworks」の一部として「Gilt (1983)」を制作しました。日本滞在中、ラウシェンバーグは大塚オーミ陶業の職人と協力して、西洋美術のシンボルと彼が旅行中に撮影した写真を組み合わせた作品を制作しました。



展覧会参加作家:

上松佑二、ルース・アサワ、ジェームズ・リー・バイヤーズ、ジョン・ケージ、サム・フランシス、ジョー・グード、マルシア・ハフィフ、原口典之、池田龍雄、石井茂雄、石内都、ジャスパー・ジョーンズ、アリソン・ノウルズ、小島伸明、三木富雄、元永定正、中村宏、中西夏之、センガ・ネングディ、オノ・ヨーコ、ケン・プライス、ロバート・ラウシェンバーグ、エド・ルシャ、リチャード・セラ、篠原有司男、白髪富士子、白髪一雄、高松次郎、アン・トルイット、吉田稔郎

下記作家による映像は、展覧会期中、11月6日午後6時から8時、またその後隔週で予定されている以下の上映会で上映されます。

リンダ・ホーランド監督作品「ANPO:Art X War」 (11月6日、午後6時 - 8時)
上映後にホーランド監督と映画監督で作家のエド・ハルター氏との対談予定

ファーガス・マカフリーについて

ファーガス・マカフリーは2006年の設立以来、24以上のアメリカ、ヨーロッパ、日本の著名な戦後および現代美術作家を紹介し、多角的なプログラミングを展開しています。戦後日本美術や欧米の作家たちの国際的な評価を確立させるうえで中心的な役割を担ってきました。ファーガス・マカフリーはニューヨーク、東京、サン・バルテルミー島（カリブ海）にスペースがございます。

プレスのお問い合わせ:

Tel: +1-212-988-2200

Email: press@fergusmccaffrey.com

Images:

1. Jasper Johns, *Souvenir*, 1964. Encaustic and collage on canvas with objects, 28 3/4 x 21 inches (73 x 53.3 cm) © Jasper Johns
2. Tatsuo Ikeda, *Portrait (Kinukosuri)*, 1952. Oil on silk, 9 3/4 x 7 5/8 inches (24.8 x 19.4 cm) © Tatsuo Ikeda
3. Hiroshi Nakamura, *Telescope and Cine-film*, April 1966/2019. Oil on canvas, 44 1/8 x 64 inches (112 x 162.5 cm) © Hiroshi Nakamura
4. Noriyuki Haraguchi, *Untitled (Corsair)*, 1972. Silkscreen on Wasi paper, 21 1/4 x 31 7/8 inches (54 x 81 cm), Edition 7 of 50 © Noriyuki Haraguchi
5. Ed Ruscha, *Japan is America*, 2019. Acrylic on museum board, 24 x 34 inches (61 x 86.4 cm) © Ed Ruscha
6. Ken Price, *Untitled*, 1968. Glazed ceramic, 3 1/8 x 4 1/2 x 3 1/4 inches (7.9 x 11.4 x 8.3 cm) © Estate of Ken Price
7. Natsuyuki Nakanishi, *Compact Object*, 1962-1968. Mixed media sculpture, 10 x 6 3/4 x 6 3/4 inches (25.5 x 17 x 17 cm) © Estate of Natsuyuki Nakanishi
8. Anne Truitt, *Valley Forge*, 1963. Acrylic on wood, 60 1/2 x 60 1/2 x 12 inches (153.7 x 153.7 x 30.5 cm) © Estate of Anne Truitt
9. Robert Rauschenberg, *Gilt*, 1983. Mixed media on Japanese clay, 39 1/4 x 75 1/4 inches (99.7 x 191.1 cm) © Estate of Robert Rauschenberg